吉岡原遺跡発掘調査概報

よし おか ばら

1987

掛川市教育委員会

例　　言

1．本書は、昭和61年11月21日から昭和62年３月31日まで実施した静岡県掛川市吉岡字道下1537－１他に所在する吉岡原遺跡の発掘調査概報である。

2．発掘調査地点の地籍は、掛川市吉岡字道下1537－１である。

3．発掘調査は、吉岡原遺跡地内で計画された茶園改植に先立つ緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施した。

4．発掘調査では、土地所有者の大井静夫氏には埋蔵文化財に対するご理解とご協力を頂いている。

5．発掘調査は、掛川市教育委員会の松本一男が担当し、市内在住の戸塚和美君には多大な協力を得ている。

6．発掘調査ならびに報告書作成にあたり、前田庄一・松井一明両氏にはご教示・ご協力を得ている。特に、前田庄一氏にあっては現地調査のお手伝いもしていただいている。

7．発掘調査ならびに整理調査では、次の方々の参加を得ている。

戸塚和美・鈴木きの・大場せつ・大場しま・大庭三代子・小沢ろく・久保田まさ・鈴木辰江・鈴木はつ子・松浦せい子・萩田百江・萩田みさ子・萩田ふさ・宮崎充子・鈴木操・佐藤かやの・石川豊子

8．本書の編集は松本が行い、遺物の実測・トレース・執筆ならびに遺構全体図のトレースについては戸塚が行い、他の作業の全てと執筆は松本が行った。

9．発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長伊藤昌明・社会教育課長安達啓・文化係長岩井克允のもとに社会教育課が所管した。

10．調査によって得た資料は全て掛川市教育委員会が保管している。

目　　次

1．発掘調査と遺跡の概要　（松本）……1
　調査に至る経緯と調査の目的……1
　調査の方法と経過……1
　遺跡の位置と周辺環境……3
2．調査の内容　（松本）……6
　遺　構……7
　遺　物　（戸塚）……16
3．ま と め　（松本）……19

掛川市教育センター蔵書
昭 63.1.23 和
第　号
受入

1　発掘調査と遺跡の概要

《調査に至る経緯と調査の目的》

掛川市街地より国道１号線を西に向けて車を10分程走らせると、袋井市との境を流れる川に行き当たる。原野谷川である。掛川市の北、白光山赤メゾレ山に端を発し、南、西、南へと向きを変え袋井市域において太田川と合流する。全長を28380ｍと測り、掛川市域を流れる川の中で最も長い川である。この原の谷川流域には、上流より中・小さまざまの大きさの河岸段丘が認められ、同時に数多くの遺跡が所在する。今回紹介する吉岡原遺跡も、通称“吉岡原”と呼ばれる河岸段丘面に立地している。

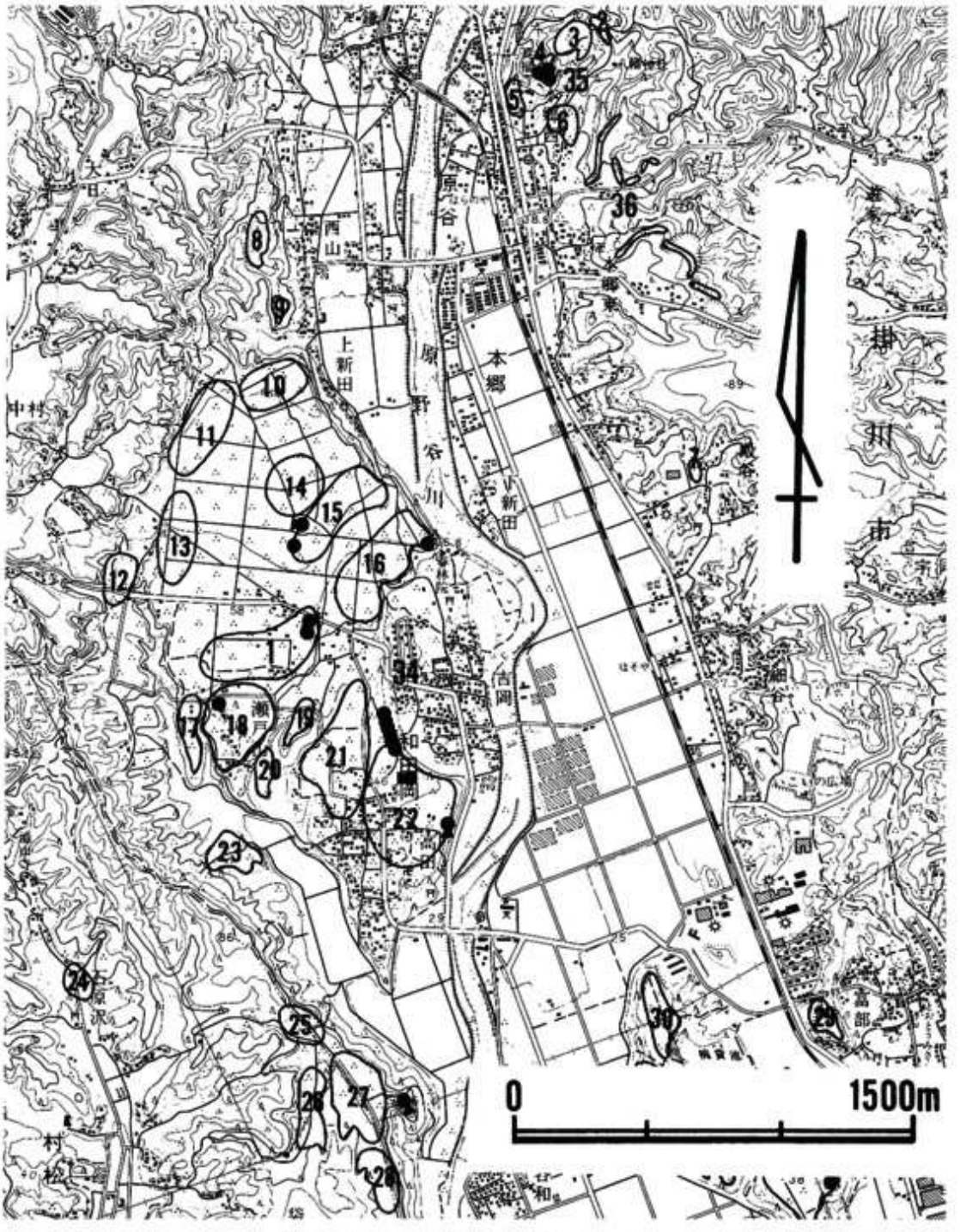
現在、吉岡原一帯は茶園として利用されており、茶の生産量日本一を誇る掛川市域の中にあって、屈指の地区としてあげられる。いつの時代・何事にも改革はつきもので、この茶樹栽培においても近年より品種改良が行われている。この品種改良では、水はけを考慮した耕作土の入れ替え（地表土と地山土との転換“天地返し”）が取り入れられており、大地に刻まれた人々の足跡（遺跡）に思わぬ被害をもたらす結果となった。

今回調査の対象となった吉岡原遺跡のこの地点でも茶園改植の計画が上がり、遺跡の消滅が免れない状況となった。そこで掛川市教育委員会では、国と静岡県の補助金を得て、遺跡の記録保存を目的として発掘調査を実施した。

《調査の方法と経過》

今回実施した発掘調査地点は、原野谷川が形成した河岸段丘“吉岡原”の東端部、標高57ｍ付近に位置する。調査区の中央付近を境に東域にかけて河岸段丘斜面に入り、縁辺部との比高差２ｍ70cm近くを測る。

現地調査では、調査地周辺の状況にならい、まず重機により耕作土の除去を行った。除去終了後に人工による包含層の掘削に入ったが、それと並行して調査区内への杭打ち作業を行った。基本杭の設定は、吉岡原遺跡の調査が初めてであること、調査地南域が耕作者の違う畑であることから、任意に調査地南西隅の地境杭を基本杭として設定した。そしてこの基本杭を（Ａ，１）杭として、北向き基本線を隣接茶樹列に合わせＮ－15°52′40″－Ｅに設定した。調査地の小区画は基本杭（Ａ，１）から東方向５ｍ毎に１，２，…，５とし、北方向５ｍ毎にＡ，Ｂ，…，Ｆとして設定し、区画名称を両軸をかみ合わせて（Ａ－１）グリッド、（Ｂ－２）グリッドと呼称した。したがって杭の名称は、グリッドの南西隅の杭がそのグリッドの名称と同じくなるようにした。つまり（Ａ－１）グリッドの南西隅の杭が（Ａ－１）杭、（Ｃ－３）グリッドの南西隅の杭が（Ｃ－３）杭であり、逆に（Ｂ－２）杭の北東位にある小区画の名称は（Ｂ－２）グリッド、（Ａ－３）杭の



1.	吉岡原遺跡	8.	後藤ヶ谷	15.	高田上ノ段	21.	高田	27.	金鋳原(久能山)
2.	八海山	9.	中山	16.	吉岡下ノ段	22.	女高	29.	二反田
3.	又太郎	10.	城ノ腰	17.	瀬戸山II	23.	平田ヶ谷	30.	岡津原I
4.	安里山	11.	東原	18.	瀬戸山I	24.	石原沢	34.	和田岡古墳群
5.	長福寺西	12.	今坂	19.	瀬戸山III	25.	境前	35.	長福寺古墳群
6.	古城	13.	溝ノ口	20.	花ノ腰	26.	東山	36.	本郷地区横穴群
7.	殿ノ台	14.	中原						

第1図　遺跡の位置と弥生後期～古墳時代遺跡

北東位にある小区画の名称は(A－3)グリッドと呼称される。調査は、ここに設定された区画名称に従い、遺構の検出位置、遺物の出土位置などを表記した。本報告でも、この調査時における表記に従っている。

調査時における遺物の取り上げは、遺構外出土遺物については上記区画名称に従って表記し、遺構内出土遺物については基本的に遺構毎のドット化を行った。

発掘作業風景

現地での図面は、小区画に合わせ20分の1縮尺で遺構全体図を作成し、遺構内遺物出土状況・主な遺構の平面並びに断面図を10分の1縮尺により作成した。

写真による記録は、ブローニーサイズ(6×7)原画白黒と35㎜サイズ原画白黒、そして35㎜カラーリバーサルにより撮影を行った。

重機稼動風景

現地での発掘調査は、11月21～22日の両日重機による茶樹抜根、11月27～28日茶樹焼却、11月29～12月2日重機による耕作土掘削を行い、人工による作業は12月1日から始めた。年内には、主に古墳の周溝を調査し、調査区東域の斜面部分の調査を行い、年を明けて残りの住居跡・土坑・小穴などの調査を行った。そして1月27日の調査区完掘状況写真撮影を終え、29・30日両日の重機による埋戻し作業を行い、現地調査の完了とした。

《遺跡の位置と周辺環境》

掛川駅から袋井市山梨に向かうバスがある。このバスに15分程乗り県道掛川山梨線を西に進むと、掛川市の西域を北から南に流れる川"原野谷川"が横たわる。このあたりが和田岡地区・各和である。さらに足を進めるとバスは川を渡り、高田・吉岡の家並へと入る。そしてバスは、原野谷川が形成した通称高田原・吉岡原と呼ばれる河岸段丘上にあがり、一路山梨方面に進む。今回紹介している吉岡原遺跡は、この吉岡原に占地する遺跡で、バスが通る県道掛川山梨線の南から南西域に広がっている。

この高田原・吉岡原は、古くから吉岡大塚古墳・春林院古墳・瓢塚古墳・行人塚古墳などの和田岡古墳群が占地する一帯として有名である。そこでこの項では、吉岡原遺跡周辺に分布する遺跡を紹介することを主として話を進めたい。前途したように、吉岡原遺跡が立地する吉岡原は、

遺跡の遠景

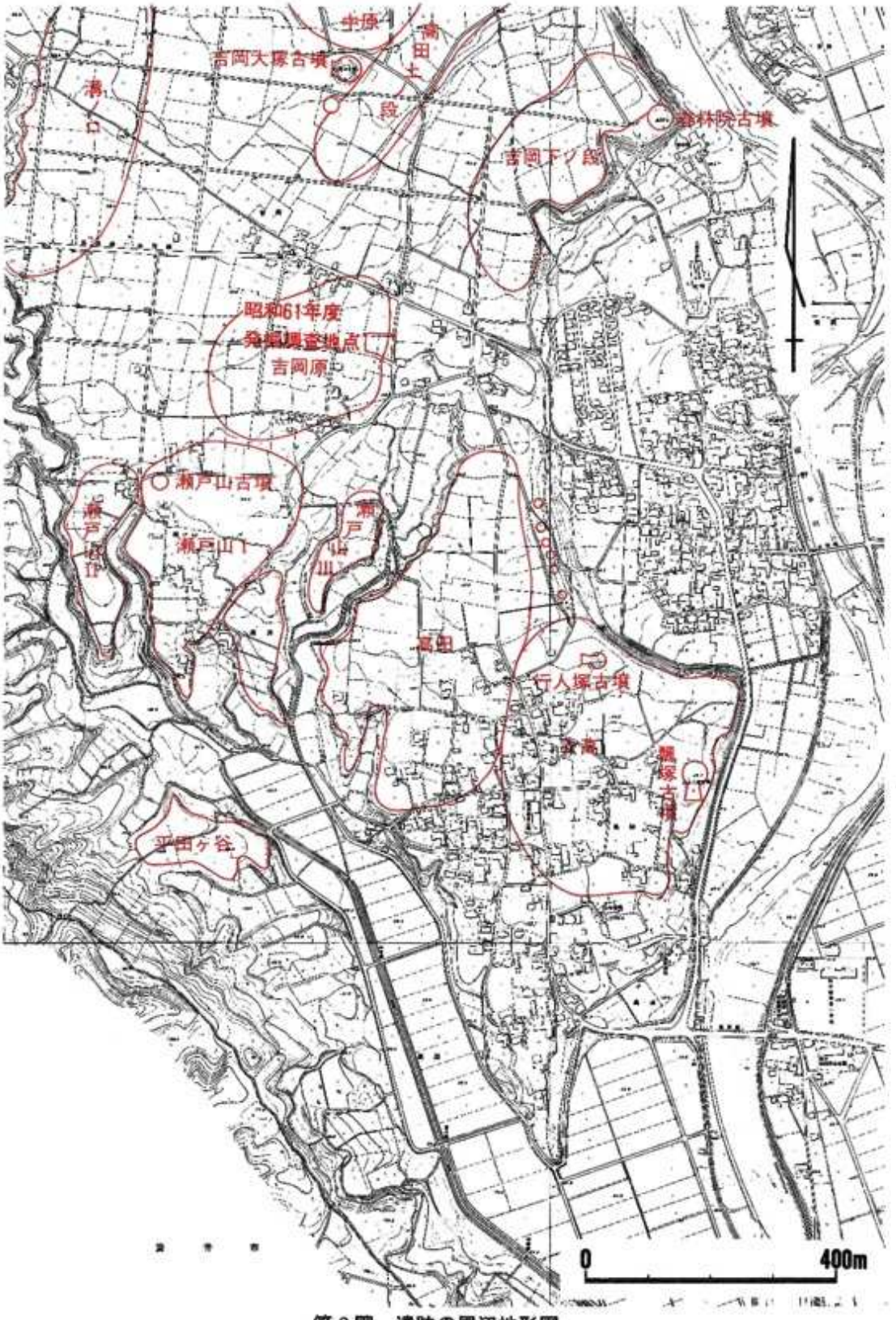
調査地全景（調査前・北から）

調査地全景（調査前・東から）

原野谷川が形成した河岸段丘である。段丘面は大きく二段面により成っている。つまり標高55～60m前後の上位段丘、そして標高40～50m前後の下位段丘の二段である。今回紹介している吉岡原遺跡は上位段丘面に立地しており調査地の標高は57m付近である。　そして第２図を見てもわかるようにこの段丘面には南から入り込む幾本もの谷が認められる。この谷が台地に営みの痕を遺した人々に潤いを与え、それがゆえに以下に記す数多くの遺跡を生んだと思われる。

第１図に示したように、原野谷川流域には吉岡原をはじめとして数多くの中小河岸段丘が発達している。そしてその段丘面上あるいはその低地面には縄文時代早期から弥生時代、古墳時代、さらには古代、中世、近世を経て現代に至る数多くの遺跡が立地している。第１図・第２図には、今回の調査で確認した弥生時代後期と古墳時代前期の同時期遺物を採取できる遺跡と古墳の分布状況を示した。吉岡原内陸部に城ノ腰・東原・溝ノ口・今坂の各遺跡、そして段丘端部付近ならびに高田原に吉岡原・瀬戸山Ⅰ～Ⅲ・花ノ腰・高田・女高の各遺跡が分布する。さらに南の各和原と呼ぶ河岸段丘上に東山・金鋳原（久能山）・陣屋北などの各遺跡、対岸南東に位置する岡津原には岡津原Ⅰ～Ⅳの各遺跡がまとまって分布していることが確認できる。また古墳についても、５世紀に築造される和田岡古墳群をはじめとして６世紀前半の小規模円墳が数多くこの吉岡原・高田原・各和原・岡津原に分布する。そして６世紀中頃に至ると対岸の本郷地区、あるいは下流域の曽我地区には大量の横穴墓が出現する。

このように周辺に数多くの同時期・同時代の遺跡をめぐらす中で、吉岡原遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代前期に集落が営まれ、５世紀中頃～６世紀初頭に古墳が築造されたと考えたい。



第２図　遺跡の周辺地形図

2　調査の内容

今回の調査で確認した遺構は、第３図遺構全体図に示したとおりで、竪穴式住居跡（ＳＢ）６軒、掘立柱建物跡（ＳＨ）１棟、土坑（ＳＦ）13基、その他の小穴（ＳＰ）多数、古墳周溝状溝（ＳＤ）１である。この内竪穴式住居跡については、調査時に全部で10軒あるのではないかということでＳＢ01～ＳＢ10まで住居跡番号を付けたのであるが、住居跡としての施設(柱穴の存在・炉址の存在など）が不充分であること、形状が不明確であることなどから、本報告ではＳＢ01～05とＳＢ07の合計６軒が住居跡であるとした。また土坑13基の内ＳＦ07～09については、遺構の形状・あり方などから土壙墓と考えてもいいのではないかと考えている。

出土遺物は、弥生時代後期後半菊川式土器ならびにＳ字状口縁をもつ甕形土器・小型丸底坩などを伴う古式土師器が中心で、この他刀子状の鉄製品が１本出土している。

以下大まかな状況を遺構・遺物に分けて説明したい。

調査区完掘状況（北から）

《遺　　構》

今回の調査で確認した遺構は、前述したとおり竪穴式住居跡６軒、堀立柱建物跡１棟、土坑９基、古墳周濠状溝１、その他小穴多数である。ここでは全ての遺構について紹介したいが、頁数の関係から、構築時期の違う竪穴式住居跡ＳＢ03とＳＢ07を比較しながら紹介すること、特徴的な形状を示した土坑ＳＦ08のみを簡単に紹介させていただくこととする。

竪穴式住居跡ＳＢ03は、第８図１・２・３などの古式土師器を出土した住居跡である。住居跡の西側半分近くを調査区の外側にもつために形状・規模が明確でないが、平面形が隅丸方形、確認面での規模長径５ｍ12cm・短径（推定）５ｍ00cm・深さ８cm、壁溝なし、４本主柱穴型、炉は中心部よりやや北寄りに位置し住居跡貼床面直上に形成されている。

竪穴式住居跡ＳＢ07は、弥生時代後期菊川式の土器を出土した住居跡である。住居跡の平面形は楕円形に近い形をしており、確認面での規模長径５ｍ64cm・短径４ｍ80cm・深さ17cm、壁溝有り、４本主柱穴型、炉は床面上から貼床を貫く形で造られておりさらに白色粘土を使って環状に一周する帯をもつ（火皿）。炉の位置は、住居跡南側の小穴を入口部施設の痕とすれば中央部よりやや奥壁寄りに造られている。

ＳＢ03とＳＢ07とは基本的な平面構造では共通性をもつものであるが、住居跡平面形ならびに炉の形態・作り方において差違が認められる。ただし壁溝の有無においてＳＢ03に無く、ＳＢ07

調査区完掘状況（西から）

1
2
3
4
5
F
E
D
C
B
A
SH01
SF08
SF09
SF07
SB03
SB02
SD01
SB05
SB07
SB01
57.50m
57.40m
57.30m
57.20m
57.10m
57.00m
56.80m
56.60m
55.00m
55.40m
55.80m
55.20m
55.60m
56.20m
56.40m
56.00m
56.60m
57.60m
57.50m
57.40m
57.60m
57.50m
57.60m
57.50m
57.40m
57.30m
0
10m

第３図　遺構全体図

SB03床面検出状況（南から）

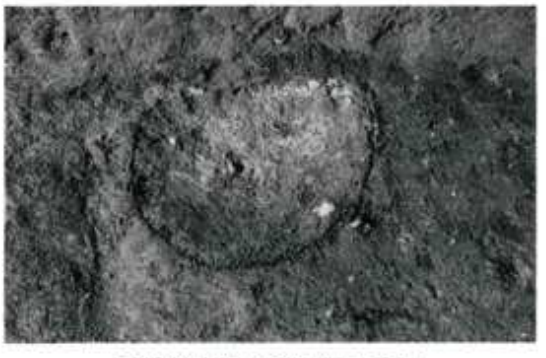
SB07床面検出状況（南から）

SB03完掘状況（南から）

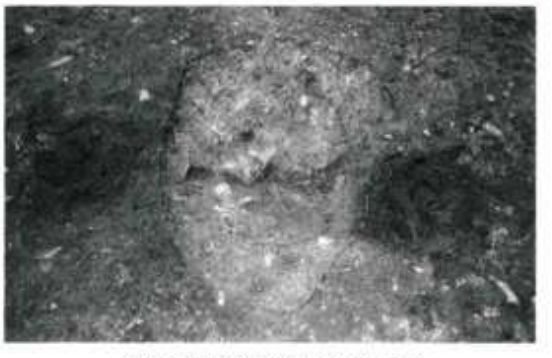
SB07完掘状況（南から）

SB03炉検出状況（東から）

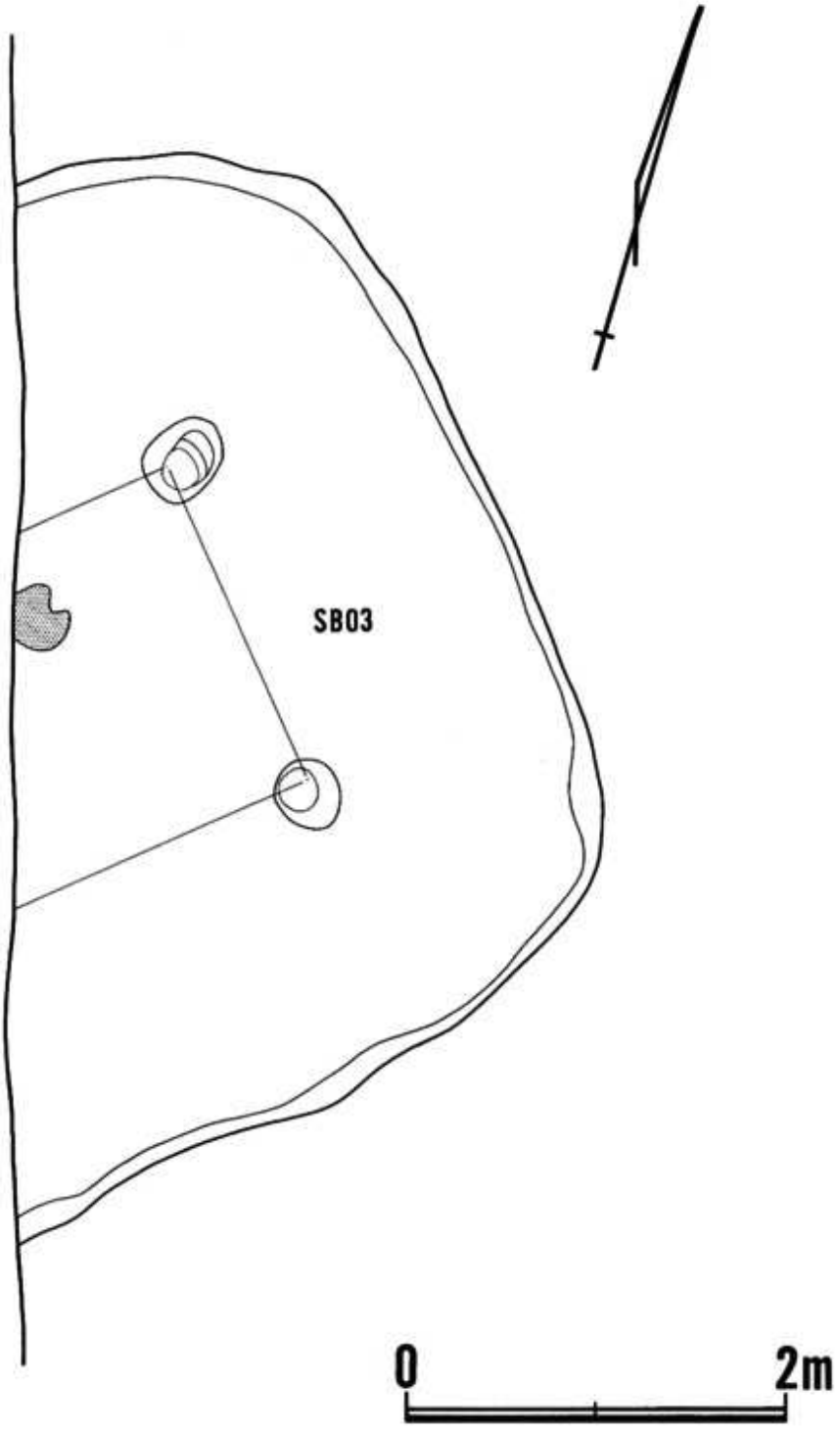
SB07炉検出状況（西から）



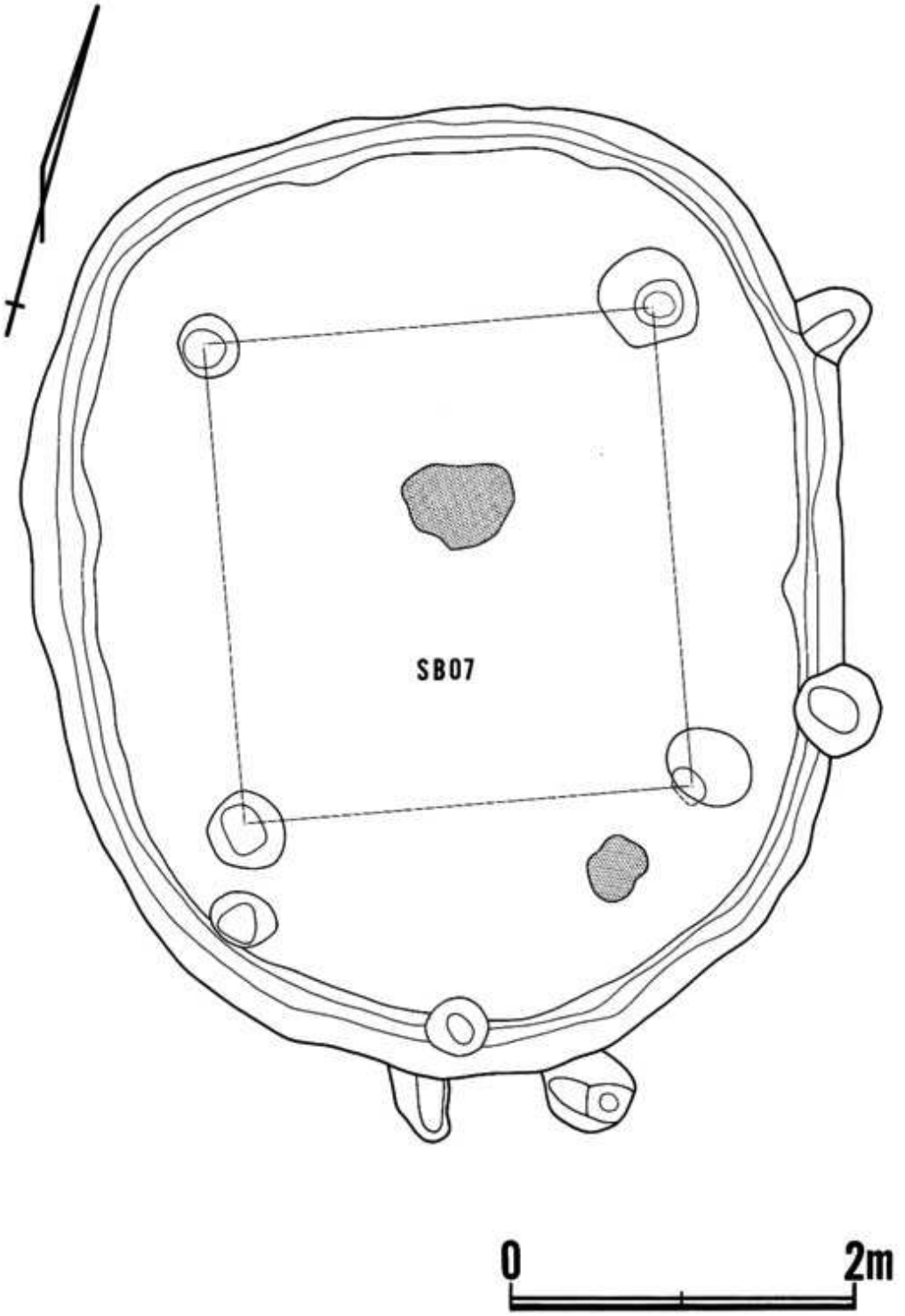
SB03炉完掘状況（東から）



SB07炉完掘状況（西から）



第 4 図　SB03平面実測図



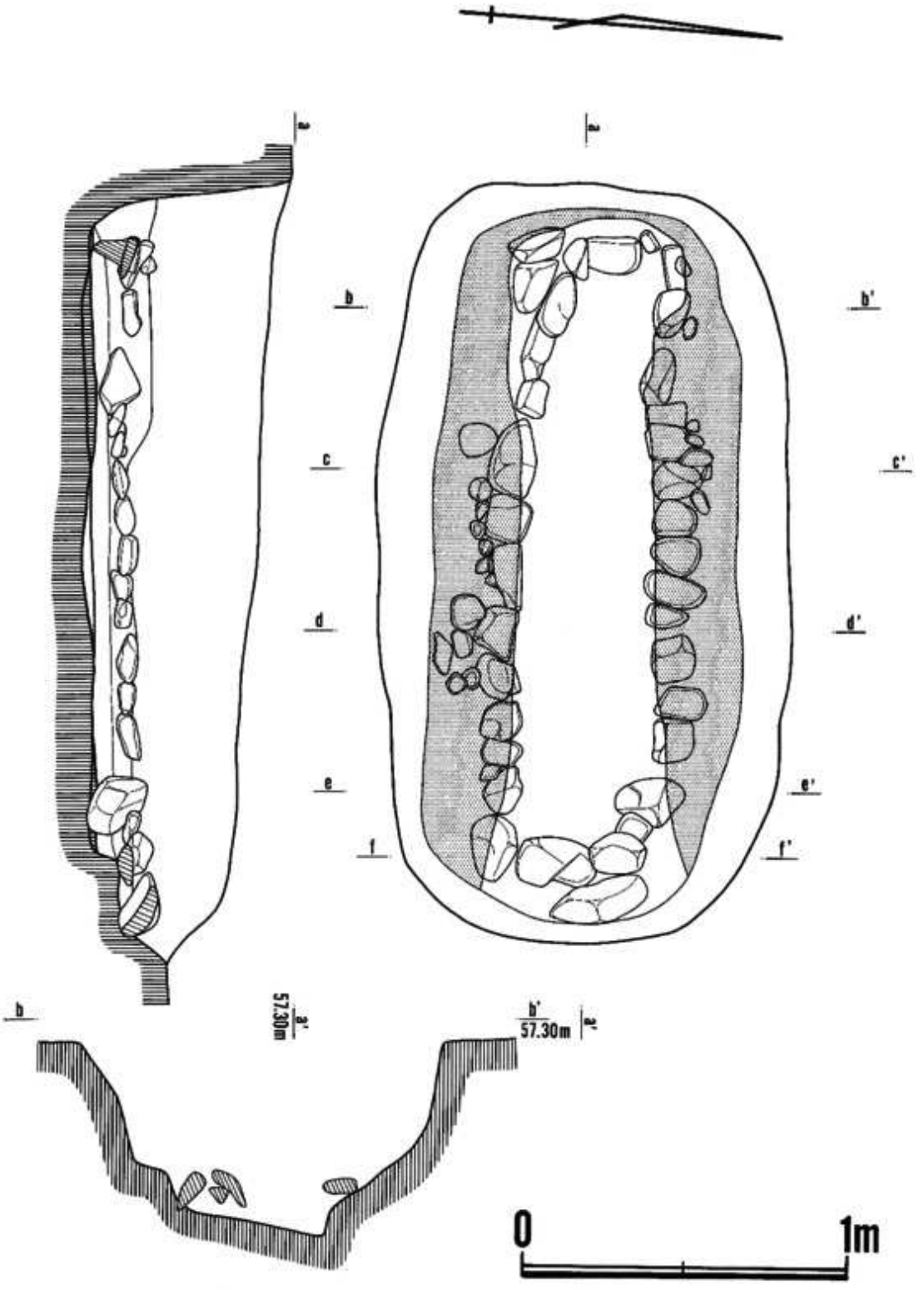
第５図　SB07平面実測図

に有るという違いは認められるが、ＳＢ03と同時期の遺物を出土したＳＢ05では壁溝があるので時間的な変化における差違としては取り扱かわない。

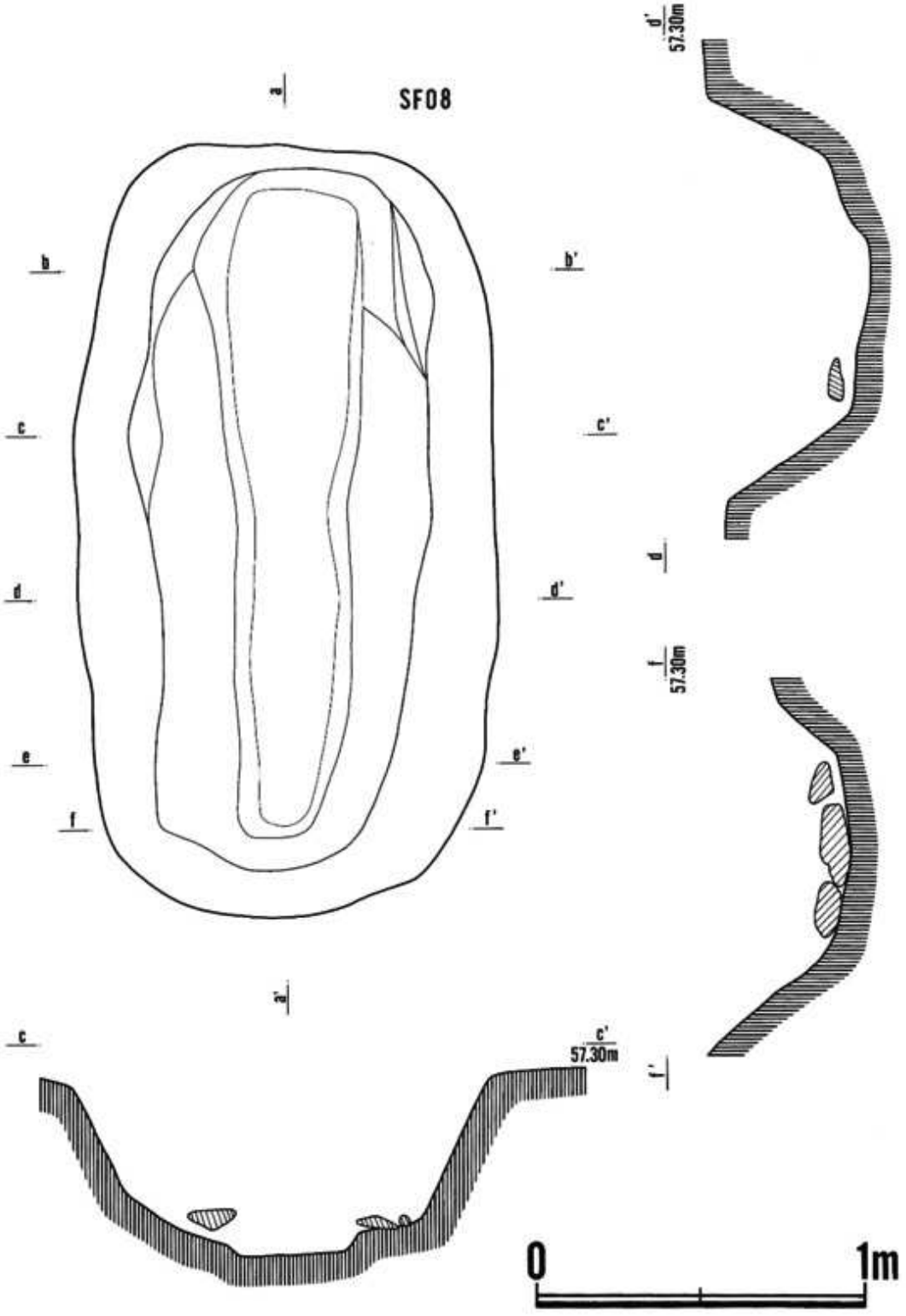
ＳＦ08は、調査区の北壁際Ｅ～Ｆ－３グリッドに検出した土坑で、そのすぐ東側は河岸段丘の斜面に当たりまさに段丘縁辺部に位置している。確認面における規模は、長さ２ｍ35cm・幅１ｍ28cm・西側の深さ62cm・東側の深さ15cmを測る。長軸方位は、Ｅ－４°20′－Ｎでほぼ東向き、段丘縁辺面に対し直交する。掘り方は、第７図のように全体を二段掘りするもので、段の高さ４～５cm・幅10～25cm程である。したがって土坑の中央部は一段低く、長さ１ｍ94cm・幅15～35cmを測る。そして第６図に示してあるとおり、段の縁には上面がほぼ平坦な面をもつ河原石が一周しており、さらにその上面には（図に網かけした部分に）黄色粘土が貼られていた。図示しなかったが、その上面には黒色土層が覆われており土層観察では、棺などを想定できるような落ち込みは認められなかった。またこの土坑からの出土遺物は、黒色土から出土した弥生後期から古式土師器どちらともとれる土器小破片のみで、この土坑が穿たれた時期は明確とならなかった。ただ遺構のあり方から、竪穴式の土壙墓と見てよいであろうし、また周辺に存在する土坑（これも土壙墓と呼んでよいであろうが）ＳＦ07・ＳＦ09の出土遺物の内容から古墳時代前期の可能性大と言っても過言でないと考えている。

SF08石組検出状況

SF08完掘状況



第6図　SF08実測図(1)



第７図　SF08実測図(2)

SD01完掘状況（西から）

SD01完掘状況（北から）

《遺　物》

今回の調査で出土した遺物は、ほとんど土器の類である。出土土器の多くは小破片であり、その量もポリコンテナ（545×336×200）6杯程で極めて少ない。遺構内出土土器の多くも小破片であり、しかも覆土中からの出土であるため遺構の時期を決定する手掛りとしては極めて消極的である。しかしその中に完形品、もしくはそれに準ずるものも数点含まれている。それらを時期的にみると、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものであるが、その多くは後者に属されるものである。今回はこれらの出土土器のうち完形品をはじめ、主なものを抽出し、第8図に掲載した。以下番号順に紹介していく。

1～3はＳＢ03の出土土器である。1と2は小型丸底坩形土器で、1は口縁部が長く、ハの字形に開き、胴部外面の一部にミガキが確認できるのみで、他は調整が不明瞭である。

2も口縁部がハの字に開くが、胴部に比べそれほど長くない。外面は口縁部下半に細い棒状工具による縦位のミガキが、口縁部上半にはナデが施されている。胴部には横位・斜位のヘラ状工具によるミガキが施されている。内面は口縁部にナデが、胴部には口縁部外面と同様の細い棒状工具によるミガキが施されている。胎土は精製されており、しかも堅緻でミガキ部分は非常に入念に施されている。

3は台付甕形土器の脚部片である。口縁部から胴部は欠損しているが、底部が平坦で、脚部の端を内側に折り返していることから、本来はＳ字状口縁を有する台付甕である。底部、脚部の外面には斜位のハケ目が施されており、脚部内面にはナデが確認される。

4はＳＢ04の出土土器で、台付甕形土器である。外面は口唇部に明瞭な担面を設け、ハケによる刻み目を施しており、口縁部から頸部にかけては縦位のハケ目、胴部には斜位のハケ目が施されている。脚部には縦位ハケ目→斜位ハケ目の後ナデ消しが施されている。内面は口縁部に横位のハケ目（遺存状態が悪く明瞭でない）が認められ、胴部には板ナデ及びナデ、脚部には斜位のハケ目が施されている。

5はＳＦ03の出土土器で、小型壺形土器の胴部～底部片である。胴部はやや偏球形を呈し、小さく丸底に近い底部をもつ。口縁部は遺存しないが、直線的にハの字形に開き、頸部が器高の中央にあるタイプの小型壺であると思われる。外面は胴部上半部にヘラ状工具による斜位のミガキが一部に観察される程度で、他は摩滅が著しい。内面は胴部にはナデ、底部には細かいハケ目が施されている。

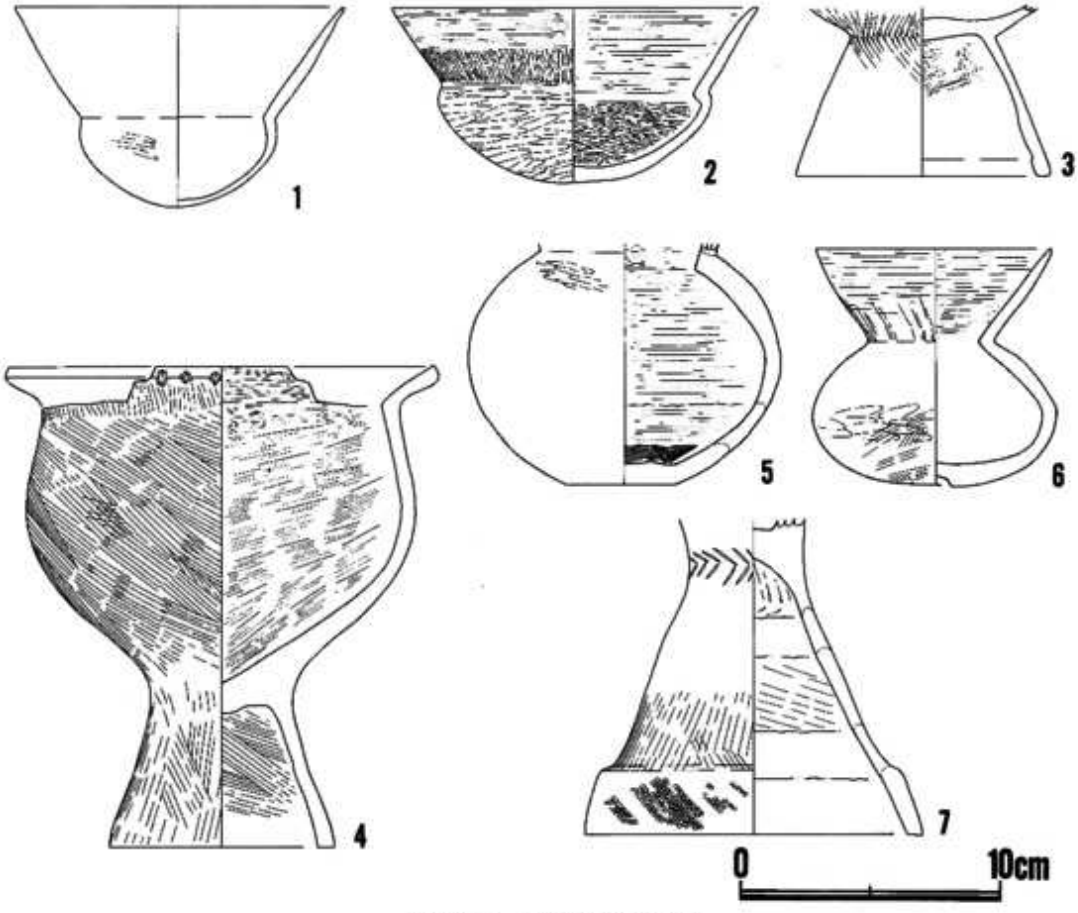
6はＳＦ06の出土土器である。小型壺形土器で、口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形である。全体に5よりも小さく、胴部はやや下ぶくれの偏球形を呈し、底部はほぼ丸底である。口縁部は直線的にハの字形に開き、頸部が器高の中央にある。外面は口縁部上半はナデ、口縁部下半から頸部にかけてはヘラ状工具による縦位のミガキ（遺存状態が悪くやや不明瞭）が認められる。胴部上半部は摩滅のため観察不可能であるが、下半部は横位のハケ、ヘラ状工具によるミガキが認め

られる。ハケ調整後ミガキを施したものであろう。

7はＳＰ 140の出土土器である。高坏形土器の脚部片で、脚端部が ㇾ 状に屈折する。外面には、坏部と脚部の接合部に櫛刺突羽状文が、脚部下半には縦位のハケ目が施されている。脚端部は摩滅のためやや観察が困難であるが、単節（ＲＬ）の斜縄文が認められる。内面には一部に斜位のハケ目が認められる。

以上が今回の主なる土器群である。これらを時期的にみると前述のように大半が古墳時代前期に属するものと考えられるが、４の台付甕、７の高坏脚部片は個々の特徴より弥生時代後期に属するものであろう。

最後に今回は紹介することのできなかった遺物について若干触れておく。ＳＥ09からは鉄製品（刀子？）が１本出土している。周辺には同形態のＳＦ07・08が存在しているが、出土遺物の多くは小破片で時期決定としての積極性に欠ける。しかし唯一ＳＦ07底面より三方に孔を穿った器台脚部片が出土していることから、これらの土壙墓は古墳時代前期のものと考えられる。ＳＦ09内出土の鉄製品も同時期の所産と考えてよかろう。ＳＦ09はＳＦ07・08に比べ形態・規模からや



第８図　出土遺物実測図

や遜色があるが、出土遺物から当遺講の性格を考えれば十墳墓と呼んでよいであろう。

SB04出土土器

SB03出土土器

SF01出土土器

SB03出土土器

SF06出土土器

SB03出土土器

SP140出土土器

3 ま と め

これまでに述べてきたとおり、今回の調査では弥生時代後期後半（菊川式期）から古墳時代前期前半（古式土師器期）の土器破片等を出土した竪穴式住居跡（ＳＢ）６軒・堀立柱建物跡（ＳＨ）１棟、土坑（ＳＦ）13基、小穴（ＳＰ）多数と、時期不明の古墳周濠状溝（ＳＤ）１である。調査面積の割には数多くの遺構と遺物を得た調査であるが、諸事情により全てを紹介し得なかったのは非常に残念である。

そこでここでは、今回の調査で得られた成果をまとめ、それらを今後の整理・報告に向けての指針としたい。

1．調査地が河岸段丘の斜面にさしかかる地点で、遺構の検出状況・遺物の出土状況から吉岡原遺跡東端の一部を確認し得たと考えている。

2．出土遺物から吉岡原遺跡が弥生時代後期（菊川式期）から古墳時代前期前半（古式土師器期）まで継続する集落跡であると考えられる。またその後、当該地点は周辺集落の墓域として利用されたものと思われる。

3．調査地周辺に住む人達から「この辺りにかつて古墳があった」ということを聞いていたがその位置が明確となった（『掛川市遺跡地図』では新発見の古墳である）。また検出した溝の平面形状から、円墳ではなく他の形をした古墳である可能性がある。

4．調査地からは、弥生時代後期後半（菊川式期）から古墳時代前期前半（古式土師器期）に至る住居跡を確認したが、これらは第４図・第５図ならびに写真に示したように時期によって住居跡の属性に若干の違いが認められた。つまり住居跡の平面形ならびに炉の形態に違いが認められた。

5．今回の調査では土壙墓と思われる遺構が３基確認できている（ＳＦ07～09）が、これらは３基とも規模・形状・遺構のあり方・遺物出土状況等がそれぞれ異っており今後検討を要するものである。特にＳＦ08にあっては今のところ市内に類例がなく、類例を待って検討を加えたい。

以上である。

吉岡原遺跡発掘調査概報

昭和62年3月30日

編集
発行　掛川市教育委員会

印刷　静岡市中村町166－1
株式会社　三　創
TEL　0542－82－4031

〒436-03
静岡県掛川市上西郷4116
掛川市教育センター
電話〈05372〉9－1508